

「開会挨拶」

株式会社 MTI 代表取締役 社長 五十嵐 誠

MTI 社長の五十嵐でございます。

本日は皆様お忙しい中、弊社主催のテクノフォーラムに御参加頂き、心より御礼を申し上げます。

弊社テクノフォーラムも今回で、東京会場は6回目、広島会場は3回目を迎えることとなりました。

弊社のような、民間の小規模な一研究開発会社としては大分背伸びをして始めましたこのようなフォーラムが、回を重ねることが出来ていますことは、まさに皆様のご理解、ご協力の賜物と改めて感謝申し上げます。

MTI は、今年5月に創立10周年を迎えました。

日本郵船の研究開発を専業とする戦略分社として設立され、世界にあまり前例のない、オペレーター視点の、ある意味大変ユニークな研究開発会社として、モデル、ベンチマークも極めて乏しい中、この10年手探り状態で、試行錯誤を重ねながら頑張ってきました。

その過程は、順風満帆というわけにはいかず、この種の研究開発会社の持つ難しさに悩む時もあったやに聞いております。

しかしながら、幸いなことに10年が経過し、ユーザー視点の技術開発会社というビジネスモデルを何とか成功させたいという歴代経営陣の思い、研究員を中心とした社員の技術への熱いこだわり、親会社として中長期的な視点をベースに、短期的な結果にこだわらず、忍耐強く見守ってくれた日本郵船の寛容さ、そして何よりも数多くの研究プロジェクトでご協力、後支援を頂いた、造船会社、船用メーカー、研究機関、大学、関係官庁等々の皆様のご支援によって、何とか、その成果で日本郵船、そしてひいては海運業界にいささかとはいえ貢献できる存在になれたのではないかと感じております。

比較的技術革新の速度が遅いといわれてきた海運・造船業界も、多分野にわたる環境規制の強化、ITを代表とする周辺産業の急速な進展などを引き金に、好むと好まざるとにかかわらず、その速度を急速に速めつつあります。

日本郵船の打ち出しております、技術力を差別化、生き残りの中心におこうという中期経営計画の「キラリ技術力」という主題に沿って、そのような変化をきちんとあるいは先取りしていく努力が、今後の弊社の死命を決するものと確信しております。

本日は、少々長い時間を頂いておりますが、弊社の研究の内容、もしくは方向性の一端など、御理解頂き、今後の協業の可能性などのヒントになれば幸いと思っておりますので、再度、日頃のご理解、ご協力への御礼を申し上げ、私の開会の挨拶といたします。